

中国語教科書の分かち書きに関する一試案

阿 部 慎 太 郎

- I. はじめに
- II. 日本語及び中国語における分かち書き
- III. 考察
- IV. おわりに

I. はじめに

西洋言語をはじめとする多くの言語では、語と語の間にスペースを空ける、いわゆる「分かち書き」で表記する。一方、中国語や日本語などの一部の言語では、分かち書きをせずに表記する。分かち書きをしない言語の場合、幼児期またはその言語を外国語として学習する者にとっては、語と語の区切りがわかりにくい。そこで、語と語の区切りを分かりやすくし、また文を読みやすくするために、幼児向けの絵本や教材、また外国語学習用の教科書などで分かち書きをすることが多い。日本における中国語教科書も、初級段階では漢字、ピンインに分かち書きがされているものがほとんどである。中国語では分かち書きに厳密な基準はないため、《汉语拼音正词法基本规则》や、《现代汉语词典》などを参考にしながら各著者が分かち書きを判断している場合が多い。

これまで相原（2014）、小川（1999, 2000, 2011, 2016）、川澄（2016）、兪（2005）などでは、中国語におけるピンイン表記及び《汉语拼音正词法基本规则》に関して研究、議論されてきた。しかし、その多くは、既存の

教科書の分かち書きが《汉语拼音正词法基本規則》の規則にあっているかについて考察、議論したものが多い。筆者もこれまで数冊の教科書を執筆し、その際《汉语拼音正词法基本規則》や先行研究を参考に、自身の分かち書きがこれらの基準と合っているかをチェックすることだけに専念していたが、分かち書きとは、一語一語を区別するため以外の目的はないのか、この分かち書きで学習者に弊害はないのか、という疑問が生まれた。その理由に、担当する学生を見ていると、一語一語の発音は正確であるがポーズ（発音時に区切る場所）が不自然である者が少なくない。具体的に言うと、一語一語すべてにポーズを置いて発音し、語と語との繋がりを意識できていないのである。実は、これは教科書の分かち書きが少なからず影響しているのではないかと考える。

筆者自身、これまで分かち書きの目的とは何か、この分かち書きは誰を対象に、何の効果があるかを十分に考えず、ただ《汉语拼音正词法基本規則》の規則にしたがっていただけであった。実は、これまでの先行研究を見ても、その部分に関して十分検討されていない。そこで、本稿では、まず分かち書きの定義及び目的を改めて整理することから始める。その後、中国語初級者を対象とし、「自然なポーズを意識し、意味の繋がりがや文法構造を理解する」という目的で教科書を作ることを仮定し、その際に既存の教科書の分かち書きで起こる問題及び効果的な分かち書きについて、語、文単位及び品詞単位でいくつか例を挙げながら考察する。

II. 日本語及び中国語における分かち書き

1. 目的、方式

中国語で、語と語との間にスペースを置くことを“分写”，逆にスペースを空けず表記することを“连写”と呼ぶ。本研究では、便宜上、「分写

(する)」、「連写 (する)」という表現を適宜用いる。

はじめに、分かち書きについて整理しておきたい。辞典では、分かち書きについて次のように書かれている。

「語と語、あるいは文節と文節の間を、あけて書くこと。」

(空は きれいに 晴れた) (小学館『新選国語辞典 (第九版)』)

「文を書く際に、読む時の便宜さをはかって、語と語との間に適宜区切りを設け、間隔をあけて書くこと。」

(『国語大辞典 (第六版)』 pp.936-937)

分写：指汉语用拼音字母注音或拼写时把几个音节分开来写”

(商務印書館『現代汉语词典 (第 6 版)』)

次に、分かち書きの目的について、光村図書ウェブサイトでは次のように説明している。

『『分かち書き』とは、語と語の間や、文節と文節との間を1字分空けて書くことをいいます。これは、低学年児童の読みの負担を少なくするため、学習上の配慮として生まれた表記法です。』

「語彙量の乏しい低学年児童には、一語一語の判別も難しいでしょう。そのため、文節単位に分かち書きすることで、読みやすく、文意をつかみやすいものにしてあるのです。」

(光村図書ウェブサイト「教科書の言葉Q & A第1回 分かち書きって、なんですか？」より引用)

これらからわかるように、中国語や日本語で分かち書きをするのは、幼児期または外国語としてその言語を学ぶ者のために、語と語あるいは文節と文節を区切り、一語の判断をしやすくすること以外に、読みやすさや文意をつかみやすくすることも目的のひとつと言える。特に、中国語のような全て漢字で表記する場合や、日本語では絵本のような平仮名のみ、もしくは平仮名が比較的多い文の場合に、こうした分かち書きは重要である。

ちなみに、文節の定義について、橋本（1948：5-6）では次のように述べている。以下、引用する。

「文には、実際の言語として、どうしてもそれ以上区切って言うことが出来ないものがある。「行け。」「いらっしゃい。」「お早う。」などはその例である。これ等は、無論意味をもたない音として見れば、「ユ・ケ」「イ・ラッ・シャ・イ」など区切ることが出来、又、「お早う」などは、それぞれ意味をもっている「お」と「早う」との二つの部分に分つ事が出来るけれども、実際の言語に於ては決してかように区切って言うことはない（区切って言うとは、音の切れ目をつける事、即ち音を断止する事である）。」

「私は/昨日/友人と/二人で/丸善へ/本を/買いに/行きました。」と、最大8つに区切ることでは出来るが、実際の言語としてはそれ以上に区切る事は無い。このように、文を実際の言語として出来るだけ多く区切った最短の一区切を私は仮に文節と名付けている。」

次に、分かち書きの方式についてみておきたい。『国語大辞典』（p.936）で、分かち書きは主に次の3つのいずれかの方式を取っていると述べている。

- (1) 単語を単位に区切るもの（単語式）
- (2) 文節を単位に区切るもの（文節式）

(3) 両者の方法を適宜採用するもの（折衷式）

『国語大辞典』（p.936）によると、西洋語などでは主に(1)の単語式によって区切られているが、日本語の場合は、「単語を意識しない場合があり、そのために、表記の段階で咄嗟の判断がつきにくい。」「単語の認識がされたとしても、助詞、助動詞の類は、他の語に付属する性質が強いだけに、これを他の語から切り離すことになじみにくい。」「格助詞などは、体言の類に続いた場合、これを独立した形で書くことができるが、接続助詞などでは、これを上の活用語から切り離した形で書くことは、実際的に非常に困難である。」など、単語式を基準に区切ることは難しく、結果、文節式もしくは折衷式のどちらかの方式で使われることが多い、と説明している。

2. 日本語絵本の分かち書き

次に、日本語の幼児向け絵本では、どのように分かち書きがされているかをみておきたい。日本語の絵本での分かち書きは、本稿にとって重要な視点となる。日本語の幼児向けの絵本は、平仮名のみ、もしくは平仮名中心で一部漢字が含まれるものが多い。また、絵本は句読点を使わない場合が多いため、語と語の区切りが判断しづらく、また文意も掴みにくい。そこで、絵本では分かち書きがされていることが多い。

いくつかの絵本を見たところ、日本語の絵本は基本的に語ではなく文節の単位で分かち書きされることが多い。しかし、文節の単位は絵本によってばらつきがあり、自由度が高いと感じる。図1は、比較的最小の文節単位で区切られているが、図2は、文節から考えると「わたしの/みきに」⁽¹⁾、

(1) 分かち書きは、通常スペースを空けるが、本稿では便宜上スラッシュ「/」で表記する。

「たのしく/すごして」としてもよいところであるが、「わたしのみきに」、
「たのしくすごして」のように連写している。絵本に分かち書きは、著者
がどのようにこの文章を読み手に伝えたいかが、大きく影響しているよう
に感じる。また、絵本は母語形成にとって重要な読み物であり、母語話者
は幼少期に絵本に分かち書きから自然なポーズ、イントネーションも身に
つけているのである。



図1. 絵本『シャオユイのさんぽ』



だが それから そのこは
ながいあいだ こなかつた…
きは かなしかつた。
ところが あるひ
そのこが ひよっこり もどつてきたので
うれしき いっぱい からだを ふるわせ
きはいつた 「さあ ほうや
わたしのみきに 木のほりよ
わたしのえだに ぶらさがり
たのしくごして おゆきよ ほうや。」



「きのほりしている ひまはない」
おとなになつた そのこは いった。
「あだたかな いえが ほしい。
およめさんがほしい こどもがほしい
だから いえが いる
ほくに いえを くれるかい。」
きが いった 「わたしには いえはないのだよ
この もりが わたしの いえだから。
だけど わたしの えだをきり
いえを たてることは できるはず。
それで たのしく やれるでしょう。」



図 2. 絵本『おおきな木』

3. 中国語教科書の分かち書き

次に、本節では中国語教科書における分かち書きの状況を概観する。冒頭で述べた通り、現在中国語教科書の分かち書きに厳密な基準はなく、各著者、出版社が判断するのだが、先述した通り、教科書の多くは《汉语拼音正词法基本规则》や辞書などを基準にしているため、一部違いはあるもののほぼ同じような分かち書きになっている。また、図3のように、漢字とピンイン両方に分かち書きをし、会話文はほとんどの教科書で分かち書きがされている。文法ポイントの例文は、分かち書きがされているものとされていないものとに分かれる。ちなみに、中国語教科書は、周知のとおり大半は語の単位で区切られる。次章では、こうした語で区切る事による問題点を詳しく考えていきたい。なお、《汉语拼音正词法基本规则》の詳細については、本稿 I で挙げた先行研究を参考にされたい。

そんな中、図4、図5のように、これまでとは異なる分かち書きの教科

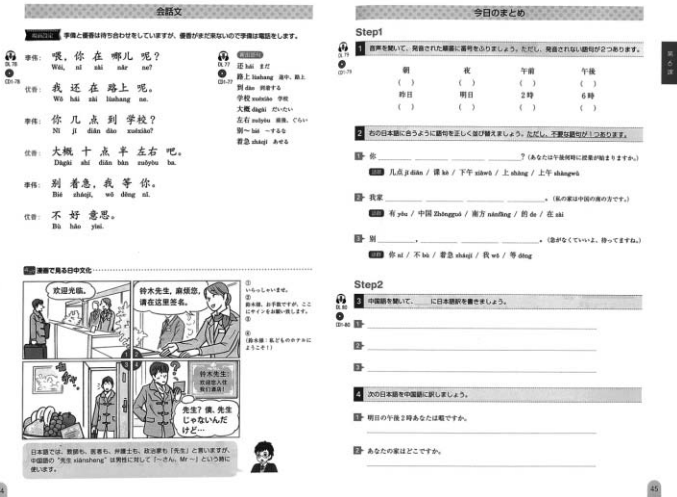


図3. 初級教科書『発音重視！中国語初級マスター22』

書も見られる。図4の教科書は、初級向けであるが、全課例文および会話文において中国語に分かち書きがされておらず、ピンインのみ分かち書きで表記している。ちなみに、ピンインの分かち書きは、一般的な教科書と同様の区切りである。また、ピンインは中国語の下部に表記する教科書が多いが、本教科書は左右に分けて表記している。

図5の高校生向け教科書は、ピンイン表記に関してこれまではない新たな表記法を使っている。例えば、通常“自行车”はzìxíngchēと連写するが、本書では“自行车 zì・xíng・chē”のように、二音節以上の語に対して一文字ごとの発音の区切りがわかるように、第10課まで「・」を付けて表記している。ピンイン表記がまだ十分に読めない初級段階では、このように一字ごとに「・」を振ることは有効であり、特に本書が高校生向け教科書ということを考えると、効果的な表記法であろう。また、本書「はじめに」では、こうした分かち書きについて説明を加えている。中国語教



図4. 初級教科書 『“アクション！” “開始！” —コミュニケーション中国語—』



図5. 高校生向け教科書『改定新版 高校中国語』

科書の多くは、教科書内で分かち書きに関する説明が明記されていない。特に初級段階では、分かち書きとは何か、また教科書の分かち書きの見方について解説は必要ではないだろうか。

最後に、中国で出版されている中国語学習者用初級教科書及び初級多読教材の分かち書きについて触れておきたい。数冊の教科書を見たところ、ピンインに関しては基本的に日本で出版されている教科書と同じ基準で分かち書きがされている。しかし、中国語の部分に関しては、実はこの図6の教科書以外にもいくつか見られるのだが、スペースの幅に統一感がなく、学習者にとって分かち書きかどうか判断しにくいものも少なくない。これはレイアウトの問題ではあるが、特に中国語の分かち書きに関しては十分配慮されているとは言いがたい。

また、図7は中国で出版されている多読教材で、本シリーズは Beginner

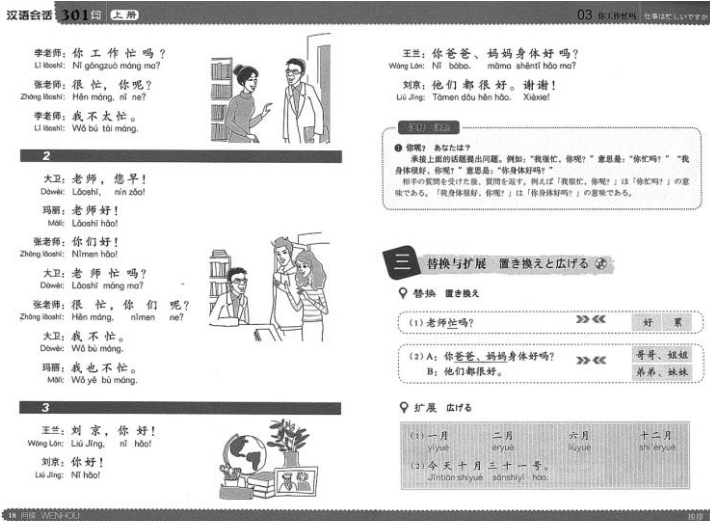


図6. 中国で出版されている初級教科書
《汉语会话301句 上册 第四版》(日本語注釈本)

(300 words) から Advanced (5,000 words) までの 6 段階設定されている。本書は、その中の Beginner (300 words) に位置付けられており、内容を見ると、日本では第二外国語履修 1 年次相当と判断できる。この教材を見ると、漢字の分かち書きはされていない。またピンインに関して一字に対してピンインが振られており、ここまで見てきた基準とは異なる。スペースは空いているものの、これは分かち書きがされていないのと同様と考えてよい。本書は多読用教材であり、分かち書きをしないのには何かしらの意図があるのかもしれない。こうした中国で出版されている教科書の分かち書きについては十分検証できていないため、継続して調査していきたい。

shí jiān guò de hěn kuài wǒ shí sān suì le
时间过得很快，我十三岁了，
xiàn zài wǒ cháng cháng qù kàn tā
现在我常常去看他。



図 7. 中国で出版されている多読教材
入门级《家庭：爷爷和我》

4. 小 結

分かち書きには、大きく①単語式、②文節式、③折衷式があり、日本語が文節式または折衷式であるのに対して、中国語の教科書は単語式に近い区切りである。単語式は、一語の区別をつけるためには有効であろう。しかし、橋本（1948：5-6）の文節の説明でもあるように、日本語の「おはよう」は、構造的に「お」と「早う」に区切れたとしても、実際の言語において「おはよう」を区切って言うことはない。これは、中国語でも同じで、たとえ語の単位で区切る事ができても、音の切れ目という点では不自然な切り方になる場合がある。

分かち書きの基準として、単語式と文節式どちらが良くてどちらが悪いということはない。重要なのは、それぞれどのような特徴があるかを理解し、目的に応じて使い分けることである。全て漢字で表記する中国語では、一語の区別がつきにくく、単語の区別をつけるために語の単位で区切ることは有効である。しかし、教科書の分かち書きには、単語の区別をつける以外の目的はないのだろうか、漢字圏である日本語母語話者はそれほどまで単語の区別がつかないものだろうか、文節式という視点から分かち書きを見る必要はないだろうか。このように少し視点を変えると、これまでの中国語教科書の分かち書きに対して見直す点は出てくる。

中国語学習者は、高校、大学、社会人、さらには中国語を専門とする者から週1回の第二外国語履修者まで多岐にわたる。また、中国語の教科書は、「発音重視」、「コミュニケーション」、「アクティブラーニング」など、それぞれ教科書の特色を出している。そうした中、『“アクション！” “開始！” —コミュニケーション中国語』や『改定新版 高校中国語』のように、教科書の対象、目的に応じて、分かち書きやピンイン表記に自由度があってもよいのではないだろうか。そこで、本稿では、中国語初級者を対象とし、ポーズの自然さ、意味の繋がりや文法構造を理解する、という目

的で教科書を作ることを仮定した場合に、従来の中国語教科書の分かち書きの問題点や、効果的な分かち書きについて試案する。

Ⅲ. 考 察

先述した通り、初級学習者で、一語一語の発音は正確であるが、分写している個所全てでポーズを置いて発音する学習者が後を絶たない。文レベルでは、一語一語の正確さ以外に、ポーズの位置、アクセントや速度なども重要であり、こうした部分の指導も大事な発音指導であると考えられる。

中国語は、分かち書きが基本的に単語レベルで区切られることは先ほど述べた通りである。では、上記のように教科書の指導ポイントをポーズに置いた場合、これまでの分かち書きではどの部分が問題となるか、またどのような分かち書きが有効かを、語、文、及び品詞レベルにわけて検討していく。

1. 語、文レベル

はじめに、語、文レベルでみていきたい。語レベルの問題は、すでに多くの論文や書籍で議論されているため、本書では他の論文の指摘と重なる部分があるが少し取り上げる。次のような語は、教科書では分写するケースが多い。

男/朋友（ボーイフレンド）

女/朋友（ガールフレンド）

热/咖啡（ホットコーヒー）

冰/咖啡（アイスコーヒー）

电子/词典（電子辞書）

电子/游戏（テレビゲーム）

中国/菜（中華料理）

日本/料理（日本料理）

麻婆/豆腐（麻婆豆腐）

北京/烤鸭（北京ダック）

电话/号码 (電話番号)	邮箱/地址 (メールアドレス)
大阪/站 (大阪駅)	兄弟/姐妹 (兄弟姉妹)
快餐/店 (ファストフード店)	北京/大学 (北京大学)
同班/同学 (クラスメート)	体育/运动 (スポーツ)
世界/遗产 (世界遺産)	名胜/古迹 (名所旧跡)
日本/文学 (日本文学)	经济/系 (経済学部) など

例えば、「ボーイフレンド」を意味する“男朋友”は，“男”（男），“朋友”（友達）がそれぞれ独立した語になり，その基準でいくとこれらは分写する。これは，中国語が漢字一字に一つの意味を持つ言語で表語文字，表意文字と呼ばれる所以でもある。しかし，意味の面で考えると“男朋友”をこれ以上区切ることはできず，発音時も途中ポーズを置くことはできない。このように，複合名詞（2つ以上の名詞が組み合わさってできている語）の分かち書きは，検討する必要がある。

また，“中国/菜”，“大阪/站”，“快餐/店”などは，教科書によって分写か連写かが分かれるところである。“○○+菜”，“○○+站”という構造であるのだが，これらは通常我々は一語と認識し，途中ポーズを置かない。このように，構造ではなく意味の繋がりで考えた場合，教科書においてこれらの語も分写するのが適当かどうか悩むところである。

次に，文レベルでの分かち書きについて考えたい。教科書での文レベルの分かち書きはこれまであまり議論されてこなかった。

你/早。(おはよう。)

早上/好。(おはよう。)

你/好。(こんにちは。)

好久/不/见。(お久しぶり。)

请/多/关照。(どうぞよろしく願います。)

请/进。(どうぞお入りください。), など

ここで、改めて橋本(1948:5-6)の言葉を引用する。

「文には、実際の言語として、どうしてもそれ以上区切って言うことが出来ないものがある。「行け。」「いらっしゃい。」「お早う。」などはその例である。これ等は、無論意味をもたない音として見れば、「ユ・ケ」「イ・ラッ・シャ・イ」など区切ることが出来、又、「お早う」などは、それぞれ意味をもっている「お」と「早う」との二つの部分に分つ事が出来るけれども、実際の言語に於ては決してかように区切って言うことはない(区切って言うとは、音の切れ目をつける事、即ち音を断止する事である)。」

例えば“你好。”(こんにちは。)は、意味的にこれ以上区切る事はできない。また、文の場合、全体のイントネーションも重要である。さらに、学習者の混乱を招くのが、“再见。”(さようなら。), “谢谢。”(ありがとう。), “对不起。”(ごめんなさい。)など、分写しない文が存在することである。教科書では、“你/好。”と“再见。”は同じ課で出てくることが多く、学習者はこの構造の違いを理解しているはずもない。そのような中で、“你/好。”にのみ分かち書きがされていたらそこでポーズを置く学習者がいても不思議ではない。同様に、“一月”(連写)と“一/号”(分写)のようなものも学習者にとって混乱の原因となるため、特に一年目の教科書では検討の必要があるだろう。

2. 品詞レベル

通常、下記の品詞の前後は分写する。しかし、品詞によっては単用がで

きず、他の語との繋がりが強いものもあり、これらは通常ポーズを置くことができない。特に問題となるものをいくつか取り上げてみていきたい。

a. 介詞

从：“从/六/点/开始。”（六時から始まります。）

在：“我/在/大学/学习/汉语。”（私は大学で中国語を学んでいます。）

给：“我/给/你/打/电话。”（私はあなたに電話をかけます。）

离：“你/家/离/大学/远不远？”（あなたの家は大学から遠いですか。）

对：“我/对/中国/历史/感/兴趣。”（私は中国の歴史に興味があります。）

比：“今天/比/昨天/冷。”（今日は昨日より寒い。）

輿水、島田（2009：276）では、中国語の介詞について「介詞は、後に賓語を置いて介詞連語を組み立て、その後続く動詞に関わる対象、場所、時間などをみちびく。介詞は単用できない。」と説明している。このように、介詞は単用できず、また後に続く動詞または形容詞との繋がりが強い。ため、“从六点”（六時から），“在大学”（大学で），“离大学”（大学から）、などは、間にポーズを置くことはできない。これは日本語でも同様のことが言え、意味を考えると一見当たり前のように感じるが、実際外国語になると特に初級者はこれに違和感を持たずポーズを置いてしまうのである。よって、ポーズの位置をわかりやすくするという目的の場合、介詞と後ろの語は連写するほうが効果的ではないだろうか。

また、「大学で」は、中国語では“在大学”と日本語の語順とは逆になる。他にも、「大学から遠いですか。」という文を中国語に訳す際、本来“离大学远不远？”とすべきところを、“*大学离远不远？”とする間違いが学習者に多く見られる。これは、〈“离”+場所〉という介詞の構造を十分理解していないのが原因である。特に“离”の場合、“你家离大学”のよ

うに前後とも「場所」がくるため，“你家/离/大学”のように前後で分写されていると「主語＋〈“离”＋場所〉」という構造が見えにくい。そこで，“你家/离大学”の位置で分写することにより，“离＋大学”の構造がわかりやすくなるのではないだろうか。実際、授業中このように説明をすると、「ああ、そうか」という声が聞こえてくる。たとえこれらを分写するとしても、介詞の構造をわかりやすくするための工夫は必要であろう。

b. 副詞

不：我/不/是/高中生。（私は高校生ではありません。）

也：你/也/去/吗？（あなたも行きますか。）

都：他们/都/是/中国人。（彼らは皆中国人です。）

有点儿：今天/有点儿/冷。（今日は少し寒いです。）

副詞も通常分写するが、これらも学習者はポーズを置いてしまうことが多い。中国語において、副詞は、後ろに置かれる動詞、形容詞などとの結びつきは強く、“不是”，“也去”，“都是”，“有点儿冷”は通常区切る事はなく、発音時にもポーズを置かない。このことは、中国語では，“*我也。”とは言えず，“我也去。”とすることからも副詞と後の語との繋がりが強いことがわかる。しかし、日本語母語話者は母語の干渉で、「私も（行く）」というのを“*我也。”とする誤用はよく見られる現象である。このように、日本語母語話者にとっては、まず中国語の構造や副詞とその後ろの語との繋がりとということを意識するためには、連写するのも効果的な提示ではないかと考える。

c. 量詞，数量詞

杯：一/杯/橙汁（一杯のオレンジジュース）

把：两/把/伞（二本の傘）

一下：请/等/一下。(少しお待ちください。)

(一)点儿：请/慢/点儿/说，好/吗？(少しゆっくり話してもらえませんか。)

中国語では、「数詞/量詞/名詞」それぞれで区切る教科書は多いが、これも同様に意味から考えると全て連写するか、区切るとしても輿水，島田(2009：205)で、量詞は単用できず、「数詞+量詞」を「数量詞連語」と呼ぶように，“一杯”，“两把”の繋がりは強い為，“一杯/橙汁”，“两把/伞”としたほうが自然ではないだろうか。この他に，“一下”，“(一)点儿”なども同様の考えである。

d. 文末助詞

吗：你/是/学生/吗？(あなたは学生ですか。)

吧：好/吧。(いいよ。)

呢：我/要/这个，你/呢？(私はこれがほしい，あなたは。)

文末助詞の前で一旦ポーズを置くようなことは一見あり得ないと思われるかもしれないが、実は初級学習者に意外と多い。これも、やはり分かち書きが視覚的に影響しているのではないかと考える。文末助詞は、さらに発音面でも重要である。文末助詞は軽声で発音するため、その直前の語の声調が関係する。そのため、学習者は〈○+文末助詞〉のかたまりで発音練習するのが効果的で、発音指導時はその点も意識する必要があるだろう。

e. 構造助詞“的”

“这/是/我/的/书。”(これは私の本です。)

“你/家/在/中国/的/什么/地方？”(あなたの家は中国のどこですか。)

ポーズという面で、特に気になるのが“的”である。毛・佐藤(2009)では、“的”，“地”，“得”の構造助詞は、中国語読解において重要でポイ

ントであり、“的”の前後はひとまとまりとしてとらえるように指摘している。例えば、“这/是/我/的/书。”の場合、“的”の前後でポーズを置くのは不自然であるのだが、特に“我的/书”のようにポーズを置く学習者は少なくない。これは母語の干渉があると考えられる。中国語では“的”は頻繁に出現する重要度の高い語であるため、初級教科書でも“的”の前後はひとかたまりであるということを視覚的にも理解しやすいように連写するのも一つの方法ではないだろうか。

3. 学習語彙リストでの分かち書き

最後に、《汉语拼音正词法基本规则》や辞書を基準にした分かち書きは、学習語彙リストにも影響している。中国政府公認の検定試験である〈汉语水平考试〉(新 HSK) は、計5,000語の基本語彙を選定している。また、この基本語彙の書籍もいくつか出版されおり、学習者は教科書と並行してこうした学習語彙リストを活用し学習する。

では、具体的にどのような語が影響しているか。例えば“什么时候”を例に挙げると、“什么时候”は構造上〈“什么”+“时候”〉であり、辞書でも“什么时候”は見出しにはない。また、この5,000語リストでも、“什么”「何」、 “时候”「…時(とき)」は(最も低い級である1級の)別の語として扱われており、郭春貴、郭久美子(2012)『HSK 基本語彙1級-4級』では、“时候”の例文で“你是什么时候去中国?”として“什么时候”を扱っている。“什么时候”(いつ)は、現代中国語において使用頻度は高い。学習者が“什么”「何」と“时候”「…時(とき)」という二つの語彙から、“什么时候”(いつ)という意味を推測することは難しく、“什么时候”を一語として理解した方が効率的である。また、こうした語彙リストや辞書の見出しに掲載されないような語は、日本語で「いつ」と調べても“什么时候”が出てこないのである。このような辞書では出てこない語は、特に

学習語彙リストや教科書ではしっかり新出単語として拾い、分かち書きや新出単語の扱いに関しても何かしらの配慮が必要であると考える。

IV. おわりに

本稿では、発音時のポーズや意味の繋がりという視点から見た場合に、教科書の分かち書きを始め、どのような提示をすることが学生にとって理解しやすく効果的か、いくつかの例を挙げながら考えた。絵本のような読み物とは違い、教科書の分かち書きにはやはりある程度の基準が必要であり、それが《汉语拼音正词法基本规则》や辞書であることに異論はない。しかし、問題はその基準にどこまで従うかである。例えば、先述したように、“你好。”は構造的には“你”+“好”ではあるが、実際の会話でこれを区切ることはできない。この他にも、例えば月日なども同様で、月は“一月”，“二月”と連写するが、日は“一/号”，“二/号”と分写する。これも基準に従うとそうなるのであるが、初級教科書において、こうした違いが果たして適当かと言われれば疑問が残る。このように、中国語の構造は複雑で、白黒の判断がつきにくい部分は存在する。この部分を、無理に同じ基準に当てはめようとすれば当然どこかに歪みが生じる。

繰り返しになるが、西洋語のような分かち書きをする言語の場合は、厳密な基準が必要でそれに従う必要がある。しかし、中国語や日本語のように分かち書きをしない言語の場合、対象は幼児期の母語話者もしくは、その言語を外国語として学習する者であり、分かち書きには、語と語の区切り以外に、文節の区切りもあり、またその目的は、単語の区切りをわかりやすくする以外に、文意を捉えやすくする効果もある。

筆者を含め、中国語教科書に携わる者は、分かち書きを「《汉语拼音正词法基本规则》、《现代汉语词典》に従う」、「大半の教科書がそうだから」

と一言で片づけるのではなく、対象が誰か、教科書の目的は何かを考え、それに合った新たな分かち書きがあっても良いのではないだろうか。

今回は、一部の語、文及び品詞でしか検討できなかったが、他にも多くの検討箇所が残っている。今後も継続して考えていきたい。また、これまで中国語、ピンインの両方を分かち書きすることが基本となっていたが、中国語のみにするのがよいのか、スラッシュや記号など別の記号を用いて表記するのがよいか、1冊の教科書で徐々に分かち書きを減らしていくのがよいのか、など、実際に学習者に実験調査を行い、効果的な提示方法も探っていきたい。

参考文献

- 阿部慎太郎, 紅粉芳恵, 蘭梅 (2018) 『発音重視! 中国語初級マスター22』金星堂
- 相原茂 (2014) 『中国語 未知との遭遇』現代書館
- 小川郁夫 (1999) 「中国語のピンイン表記に関するいくつかの問題」『福岡国際大学紀要(1)』, 福岡国際大学・福岡女子短期大学, pp.31-40
- 小川郁夫 (2000) 「中国語教育用「ピンイン正書法基本規則」」『福岡国際大学紀要(4)』, 福岡国際大学・福岡女子短期大学, pp.29-40
- 小川郁夫 (2011) 「ピンイン表記に関する一考察: 軽声と「分かち書き」を中心として」『名古屋大学中国語学文学論集(23)』, 名古屋大学中国語学文学會, pp.13-23
- 小川郁夫 (2016) 『『汉语拼音正词法基本规则』について』
- 郭春貴, 郭久美子 (2012) 『品詞別例文で覚える HSK 基本語彙 1 級-4 級』白帝社
- 川澄哲也 (2016) 『『漢語課本2015』のピンイン表記について: 福岡大学中国語教科書で用いるピンイン表記法の策定に向けた一作業』『福岡大学研究部論集, A, 人文科学編』, 福岡大学研究推進部, pp.21-27
- 金田一京助, 佐伯梅友, 大石初太郎, 野村雅昭編 (2011) 『新選国語辞典(第九版)』小学館
- 高等学校中国語教育研究会編 (2007) 『改定新版 高校中国語』白帝社
- 国語学会編 (1988) 『国語大辞典(第六版)』東京堂出版
- 興水優, 島田亜実 (2009) 『中国語わかる文法』大修館書店
- シェル・シルバンスタインさく, え/ほんだきいちろうやく (2007) 『おおきな木』篠崎書林

- チェン・ジーユエン作/中由美子訳 (2012)『シャオユイのさんぽ』光村教育図書
陈琦编著, 绘/石子儿 (2014)《家庭：爷爷和我》北京语言大学出版社
中国社会科学院语言研究所词典编辑室编 (2012)《现代汉语词典（第6版）》商務
印書館
橋本進吉 (1948)『國語法研究』岩波書店
古川裕監修, 鈴木慶夏 (2016)『“アクション!” “开始!” —コミュニケーション
中国語—』朝日出版社
毛丹青/テキスト・佐藤晴彦/解説 (2009)『珠玉の中国語エッセいで学ぶ 長文読
解の“秘訣” —中級から上級への橋渡し—』アルク
兪稔生 (2005)「中国語教授法の変遷」『長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要
3(1)』, 長崎ウエスレヤン大学, pp.9-13

参考 URL

- 光村図書 HP「教科書の言葉Q & A第1回 分かち書きって、なんですか？」
<https://www.mitsumura-tosho.co.jp/webmaga/kotoba/detail01.html>
(2019/11/19閲覧)
《汉语拼音正词法基本规则》(2012/06发布)
<http://www.moe.gov.cn/ewebeditor/uploadfile/2015/01/13/20150113091717604.pdf>